縄張り調査と城郭跡の資料的活用
～豊後岡城東ノ郭の縄張り調査を通して～

中西義昌

はじめに－本論の目的－

本論は、城郭史研究の一手法である縄張り調査が近世の城郭跡の整備や資料的活用に有効であることを示す。その一事例として大分県竹田市にある豊後岡城（史跡「岡城跡」、本論では豊後岡城で統一）を取り上げる。

豊後岡城に限らず、一般的に、近世城郭跡の調査や整備は、天守や櫓、城門、御殿建築などの建造物の復元や石垣などの保存修築を指すことが多い。歴史学や建築史学、考古学などの専門家が委員に名を連ね、彼らの指導のもと発掘調査や同時代史料の文献調査などを通して、対象となる城郭跡の説明が試みられてきた(1)。

ところで、城郭跡の調査・整備の場では城郭跡のかたちそのものを分析対象とすることは稀である。例えば、考古学的な調査は埋蔵文化財調査が主流であり、現存遺構は等高線による測量図で把握されるが詳細な遺構図を採ることは少ない。そのため、全体像の把握が難しく出土遺物から年代比定を行うことが主な関心となる(2)。一方、歴史学サイドの調査では、城郭跡を文献史料から裏付けようと城主の変遷や城内各部所や建造物の呼称、城郭の修築といった記録の抽出に終始する(3)。そして、建築史やこれまでの城郭史サイドの調査では、復原的考察に終始し、立地に着目した山城・平山城・平城といった分類や「山城→平山城→平城」などの変遷モデル、曲輪の配列に着目した輪郭式・連郭式、天守建築の形式に着目した望楼型・層塔型などの分類を以て言及する傾向にある(4)。

豊後岡城の場合でも、歴史学や建築史学サイドの研究者により「近世以前に構築された山城に御廟（山城的殿舎）、本丸・二の丸・三の丸御殿（平山城的殿舎）、西の丸御殿（平山城的殿舎）が設けられたところに大きな特徴がある」と、城跡遺構を様式論から説明するに留まっている(5)。防御施設としてどのような平面プランが計画されたのか、築城主体の意図が反映されたものなのか、他の近世城郭との相違点などを指摘するまでには至っていない。

この要因として、近世城郭跡の調査・整備には遺構を直接把握する調査手法が導入されておらず、城郭跡の資料的活用や他の事例との比較検討ができないことが挙げられる。

一般的に、樹木や薮に覆われた城郭跡の調査では開発行為がない限り単独事業として発掘調査や航空測量による測量図作成は難しい。そうした条件下で効率よく遺構把握を進める方法として縄張り調査による城郭跡調査がある。

縄張り調査では、地表面観察による簡易測量をもとに土塁や空堀、石垣塁線等の配置（縄張り）をケバ描きで図化する縄張り図の作成を行う。その上で縄張り分析により得られた見地をもとに城郭跡の資料的活用を進める縄張り研究が近年の城郭史研究の中で成果をあげている。各地の縄張り研究者の地道な調査により全国の中・近世城郭跡の資料化が進み、多種多様な城郭跡の類型化やタイプ毎の分布状況から分析する城郭資料論が急速に整備された(6)。このように学究の世界では城郭遺構を史料

として用いる方法論が構築されているにも関わらず、城郭跡の調査・整備の現場には十分に反映されていないのが現状である。

全国には土塁や空堀、石垣塁線が良好に残る近世城郭跡は多く、地表面観察による縄張り調査が可能である。淡路洲本城や大和高取城、近江彦根城などでは縄張り研究者による総合的研究が実践されている(7)。しかしながら、大半の近世城郭跡の調査・整備においては、縄張り調査による現存遺構の把握よりも、残存状況に偶然的要素の強い現存建物や文献史料、出土遺物などの調査に偏重して城郭跡の位置づけを行う傾向が強い。その結果、城郭跡の遺構解釈の不十分なまま整備策定計画などの方針を定め実施することが多々見られる。

以上の問題点を踏まえて、本論では、豊後岡城の調査に縄張り研究の視点を導入することで得られる見解について、既存の評価に対比させつつ示す。これにより、城郭跡の整備に縄張り研究の視点が欠かせないことを提示する。

豊後岡城は山城として良好に遺構を残す近世城郭跡であると共に早い段階から城跡整備が進められた事例である。今回、筆者は、造林や竹薮で覆われた東側の区域を中心に縄張り調査を実施した。その結果、現時点で調査・整備の関心から外れている東側において遺構を新たに確認することができた。それらの遺構は現状の補足に留まるものではなく、従来の豊後岡城の位置づけの変更を迫る新たな見地をもたらすものであった。本来ならば、この成果を踏まえて残る城域でも縄張り調査を行いたいところだが、それらの地域は整備事業が進められており今回は既存の測量図に踏査で確認することに留めた(8)。そうした制約はあったものの、東側で得られた成果だけでも縄張り研究の有用性を証明し引き続き全体の縄張り図作成を喚起するためには十分であると判断した。

なお、行論の都合で豊後岡城の城域を大きく三地区に分けている。今回、縄張り調査で遺構の確認を行った清水門跡、御廟所跡から下原門跡にかけての一帯を東ノ郭地区とする。これに対して、本丸・二の丸・三の丸跡を中心に東西の中仕切までを主郭（天神山）地区、現在家老屋敷の整備が進められる西側の西の丸跡から大手門跡・近戸門跡一帯を西御郭地区とする(9)。

一、豊後岡城の従来の位置づけについて

1、史跡整備の観点から

豊後岡城は一九三六（昭和一一）年に国指定史跡となった近世城郭跡である。緒方惟義が源義経を迎えるために築城した説や建武年間に志賀貞朝が築城した説があるがいずれも史料的に根拠が乏しい。

史料上で確認できる豊後岡城の動向は、天正後期に志賀親次が館を構えた時期まで下る(10)。親次は一五八六（天正一四）年の島津氏進攻の際には籠城抗戦し豊臣秀吉から感状を与えられた。戦後は大友吉統配下の大身家臣として豊後岡城に居たことがわかっている。一五九四（文禄三）年の大友氏改易に際して志賀親次は退去し、代わって豊臣氏直属の大名中川秀成が播磨国三木から入部している。中川氏は、豊臣政権から徳川幕府を通して転封を経験しない数少ない大名として一八七一（明治四）年まで岡城主として続く。

廃城後は建造物は撤去され次第に私有地化が進んだが、国指定史跡を期に城跡の整備が進められた。昭和四〇年代に相次いだ地震災害の復旧を契機に旧竹田市で石垣修理や公有化事業が進められた。そして、一九八四（昭和五九）年以降、保存管理計画が策定され航空測量を用いた等高線表記による測量図［図1］が作成されている。建造物の

伴わない近世城郭跡では早い段階から史跡整備に着手した事例となった(11)。

2、豊後岡城の先行研究について

著名な近世城郭にも関わらず、豊後岡城の先行研究は管見の限りでは限られたものしかみられない。

豊後岡城について郷土史研究の側から考察を試みたのは北村清士［北村一九七四］である。彼は「中川家御年譜」をもとに基本史料として『中川史料集』を刊行するなど積極的な史料紹介を行った［北村一九六九］。学術的には不備な面も多々あるが彼の成果は一定の評価が与えられるべきだろう(12)。

一九八五年に策定された『史跡岡城跡保存管理計画策定事業報告書』では、近世史から豊田寛三が、建築史から北野隆がそれぞれ豊後岡城を論じている［北野、豊田一九八五］。両氏が示した豊後岡城の評価、特に前掲の「近世以前に構築された山城に御廟（山城的殿舎）、本丸・二の丸・三の丸御殿（平山城的殿舎）、西の丸御殿（平山城的殿舎）が設けられたところに大きな特徴がある」が現在も豊後岡城の評価を規定している(13)。

一方、城郭史研究においても豊後岡城に関する先行研究は管見の限り確認できていない。そうした中で縄張り研究の方法を用いて豊後岡城の位置づけを最初に試みたのが筆者である［中西一九九九］。詳細は後述するが、様式論をあてはめた解釈に対して、縄張り論の視点から豊後岡城の縄張りを解釈し、主郭（天神山）地区の技巧的な縄張りと外郭ラインで囲まれた東ノ郭地区、西御郭地区から成る二元的な構造であることを示した。

3、文献史料・古絵図等を用いた研究視点と縄張り研究

豊後岡城に関連して文献史料や古絵図類もいくつか確認されている。基礎的な文献史料としては、「中川家文書」（神戸大学文学部日本史研究室蔵）、「豊後岡藩中川家文書」（個人蔵・竹田市立歴史資料館保管）がある(14)。地誌類・覚書では、「中川氏御先祖并御一門覚書」「両郡古談」を収録した「金城秘鑑（仁・勇・智）」、「豊岡古人語集」（複写本・大分県立図書館蔵）や「不染斎随筆」（竹田市立図書館蔵）などがある。

一方、古絵図についても、藩政期のものはいくつか紹介されているが、それ以外にも管見の限りではあるが一七世紀半ばの様相を記すと思われる資料が幾つか確認されている。いずれの古絵図も表記内容の資料批判をきちんと行えば、往時の様子を考察するのに有用な資料となる(15)。

〈1〉国立公文書館所蔵［諸国城郭絵図］《豊後国直入郡岡城絵図》［図2］
↓江戸幕府三代将軍徳川家光が全国の城持大名に提出させた「諸国城郭絵図」の一枚。便宜上、《正保岡城絵図》と記す。

〈2〉竹田市立図書館蔵《城中より各屋敷への道筋》［図3］
↓西の丸普請以前の中川久清時代の様子を描いたもの。石垣の高さなどの記述あり。《久清期岡城絵図A》と記す。以前に分割写真で紹介されている［竹田市教育委員会一九八五］。

〈3〉国立国会図書館所蔵《豊後国岡城之図》［図4］
↓〈2〉と同時期の城内屋敷配置が描かれた城絵図。《久清期岡城絵図B》と記す。

〈4〉国立国会図書館所蔵《豊後国南部岡之城図》［図5］
↓「入山屋敷」「廟所」の記述あり。久清隠居後の様子が描かれたもの。《入山期岡城絵図》と記す。

〈5〉国立国会図書館所蔵《豊後国岡城図》［図6］

↓久恒期以降、西の丸完成以後の様子が描かれたもの。同じ構図の修築控が竹田市立歴史資料館蔵で伝わっており、修築の際に双方で照合するために用いたものと思われる。

〈6〉竹田市立歴史資料館蔵《岡城真景図屏風》↓年代は下るが、一八世紀半ばの様子を描いたとされる絵画資料。

しかしながら、これらの史料・古絵図だけを用いて城郭跡を論じることには限界がある。例えば、文献史料については、城郭の築城・運用について具体的かつ直接的な記述のある一次史料は少ない問題がある。特に、近世城郭が多数築かれた一七世紀前半は史料環境が悪く城郭関連の記述を抽出するにはより困難が伴う。また、古絵図も現存遺構を把握した上で比較検討しないと資料としての活用は難しい。いずれにしても、現状の城郭遺構との照合作業が必要である。

縄張り研究の手法では、現存する城郭遺構の地表面観察に限界のある場合に精度の高い古絵図を縄張りを推定する材料として用いる。また、縄張り図の分析から得られた見地をもとに一次史料や覚書等の編纂史料を勘案しながら考察することで総合的な資料解釈による遺構評価を可能とする。そうした得られた成果が当時の城主やその集団を取り巻く社会の諸様相を知る手がかりとなる(16)。第二章・第三章では、以上のような縄張り研究の手法を活用しながら豊後岡城について考察を進める。

二、縄張り調査による遺構解釈

1、縄張り研究の観点から

既に述べたように、筆者は豊後岡城の縄張り構造について筆者は「高度な縄張り技術の多用」と、「主郭への求心的な曲輪配置」の観点から分析を行っている［中西一九九九］。

前者の縄張り技術からみた特徴は以下の通りである。

◎壁面を高石垣で固めて外敵から遮断すると共に、随所に横矢掛かりを配し虎口周りに櫓や多聞などの建造物を構えるなど攻め手に対して効果的な守備を意図した縄張りを施す。

◎主郭（天神山）地区では、弱点となる出入り口に内桝形虎口・外桝形虎口など優れた虎口プランが施された。

◎東西の郭の外郭ラインは高石垣や土塁・空堀で構成され、城域を囲い込むように山上に強固な防御線を構築した。

これらの特徴から、中川氏が織田・豊臣氏で培われた織豊系城郭の技術を使いこなし実戦的な防御を施すエリート大名であったこと、豊臣系大名として在地の国衆が根強く割拠する豊後国南部の統治に並々ならぬ意気込みで臨んだことを指摘した。

一方、曲輪配置からみた特徴は以下の通りである。

◎主郭（天神山）と、東ノ郭、西の丸跡、中川（古田）氏屋敷跡は同様の高さにあり横並びの曲輪配置となっている。

◎主郭（天神山）にみられる曲輪と虎口を組み合わせた階層的な防御は東西中仕切までで完結する。西側に広がる屋敷群は大手・近戸門を設定した外郭ラインで囲い込むことで強引に曲輪として処理している。

これらの特徴から、中川氏の家中では、大身家臣が当主への求心性を承認しながらも自立した態度を保持し続けたことを指摘した。田近氏・熊田氏・戸伏氏などの摂津時代の国衆・地侍を出自とする勢力や古田氏など織田氏の与力らに対して清秀・秀政と相次いで当主を失った中川氏の当主権が相対的に弱かったことが曲輪配置に反映したものと位置づけた。

但し、この段階では東ノ郭の周辺部は未調査のままで今後の課題としていた。そのため、主郭（天神山）地区や大身家臣屋敷が並ぶ西御郭地区に対して、東ノ郭の中川（田近）氏屋敷の位置づけができていなかった。今回、東ノ郭地区を調査することで豊後岡城についてより明確な位置づけができるようになった。次節で詳細に検討する。

2、東ノ郭・下原門地区の縄張りについて

現在、豊後岡城では西御郭地区の大身家臣屋敷を中心に史跡整備が進んでいる。しかし、同じ城内でも東ノ郭地区は近世後期には御廟所などの施設が並ぶなど機能が形骸化したこともありこれまで重要視されてこなかった。それ故、御廟所跡を除き周辺部は樹木や竹藪に覆われたままであった。今回は、それらの樹木や竹藪に覆われた区域の遺構について重点的に縄張り調査を行い、等高線による測量図［図７－１］に対して、ケバ図表記の縄張り図［図７－２］を作成した。これにより、従来の豊後岡城の評価に一石を投じる成果を得ることができた。

東ノ郭については、『中川氏御年譜』に中川秀成入部以前の東ノ郭は志賀湖左衛門親次の旧館であったこと、入部した際に旧館は六千石の大身家臣、中川（田近）平右衛門長祐が拝領し屋敷前の通りを手勢で守備することを秀成から命じられたと記されている(17)。当初、東ノ郭は中川（田近）氏の屋敷だったことがわかる。慶長二（一五九七）年に長祐の隠居分二千石を分知し、長男の長種が四千石で相続している。長祐は慶長五年の佐賀関合戦で戦死し、隠居分は次男主馬に与えられた。

その後、三代久清の代に分家の直高（主馬養子）は改易され屋敷地は中川氏の廟所に接収された(18)。一方、中川（田近）氏本家は久清から屋敷地を与えられ城外の鷹匠町に移転している。本家の屋敷地も接収され一八世紀後半には藩主中川久貞が三楽亭を建立した。その後、一九世紀前半には藩主中川久教が荘嶽社を建立している。当初は中川（田近）氏屋敷として機能したが、次第に機能を形骸化させていったことが見て取れる。

東ノ郭は、地獄谷を挟んで主郭（天神山）地区と向かい合うように位置する。東ノ郭主要部の標高は三一八ｍで主郭（本丸）の三二一・八五ｍとみてもほぼ同等の高さにある。また、主郭（天神山）地区と東ノ郭は同規模でちょうど対を成すような位置にある。

東ノ郭主要部から東側の下原門方面に向けて尾根筋が伸びる。尾根上はゆるやかに傾斜し③～⑥が連なる。尾根の南面に沿って主郭（天神山）地区から下原門に通じる城道が通り、曲輪③とｃ１・ｃ２が常に上から牽制する構造になっている。主要部①②の西側は東中仕切を経て主郭（天神山）地区に通じる。一方、主要部の北側地獄谷方面には下位曲輪にあたる⑧～⑩と、②の西側を通る帯曲輪⑪⑫が連なる。

東ノ郭の主要部は曲輪①②に分かれている。「豊岡古人語集」には元々ひとつの屋敷地を本家・分家で分けたとある。［図５］から②、及び下位曲輪⑧⑨に中川（田近）氏本家の屋敷地があったと考えられる。曲輪②は近世後期の三楽亭や荘嶽社の建立、あるいは近年の音楽堂建設などのためか現況では地下げされている。また、［図５］には曲輪①に廟所があり、①が元々中川（田近）氏の分家屋敷であったとみられる。曲輪①の北東側には谷に面して高石垣が残る。当時はこの谷に対する遮断線として機能したようである。

曲輪①と曲輪③の間には凹状になった部分があり曲輪③へ通じる出入り口（虎口ｋ１）と思われる。その脇にはスロープ状の虎口ｋ２がある。曲輪③は東西に細長い。南面に土塁ｄ１が配され城道を牽制する。曲輪

③からｃ１・ｃ２を経て曲輪④へ通じる。

曲輪③の東端には南面の城道に開いた一折れの虎口ｋ３がある。虎口ｋ３の上には基壇状のｃ１が構えられた。ｃ１の位置はちょうど傾斜が強くなる箇所に設けられており、城道を上る攻め手の牽制を意図したものと思われる。ｃ１を備えた虎口ｋ３は下原門を突破した攻め手に対して曲輪③から迎撃を想定した外桝形状の虎口と評価できる。

曲輪③の東側から一段下りて鉤の手状に折れるｃ２がある。地形上の制約から③と④が若干いびつな形でつながっているものの、ｃ２により曲輪①を起点に曲輪③を介して曲輪④を虎口空間とする外桝形虎口ｋ４が確認できる。これと同じように、鉤の手状に折れるｃ３により⑤を虎口空間とする外桝形虎口ｋ５が確認できる。さらにｋ４・ｋ５に重ねるように下原門東側の石垣塁線ｃ４も⑥を虎口空間とする下原門ｋ６を構成する。即ち、虎口ｋ４～ｋ６はｃ２～ｃ４で繰り返し通路を屈折させる連続した外桝形虎口を構成していたことが読み取れる。

下原門の外桝形虎口は前後の虎口が組み合わさって段階的に防御する仕組みが施された。最も外側の虎口ｋ６では、ｃ４の南東隅が橋頭堡の役割を果たすことで南東側からの侵入を強固に遮断している。そして、ｃ４の正面に空堀ｈ１を掘ることで攻め手の侵入を北側に絞り込んでいる。その上で唯一の侵入路に向けてｃ３の北東隅をｃ４より張り出させることで攻め手を牽制する横矢掛かりを設けている。続く虎口ｋ５では、ｃ３の南東隅は逆にセットバックすることで、ｃ２が侵入した攻め手を牽制する役割を果たす。このように、下原門の連続外桝形虎口は鉤の手を形成する石垣塁線の角が常に攻め手を牽制する橋頭堡や横矢掛かりになることが想定されており、外桝形虎口からの出撃を塁線から側面支援する工夫が施されたことがわかる。このことは、下原門の連続外桝形虎口を構成するｃ２～ｃ４が当初から一体的に計画されたことを意味する。

従来の［図７－１］では、下原門は主郭（天神山）地区から伸びる城道の先端にある城門という位置づけであった。ところが［図７－２］の成果を加味すると、下原門は、非常に複雑な構造をしていたことが明らかになった。

具体的には、主郭（天神山）地区から東中仕切→城道を経て〈⑥→ｋ６〉の外桝形虎口から城外へ出るルートと、東ノ郭①から曲輪③を経て〈④→ｋ４〉→〈⑤→ｋ５〉→〈⑥→ｋ６〉と三連続する外桝形虎口から城外に出るルートが並走する奇妙な形態の虎口プランであることがわかった。特に後者のルートから、下原門は中川（田近）氏屋敷のあった東ノ郭①を起点に繰り返し鉤の手状に屈折する外桝形虎口に組み込まれていたことがわかる。

一方、地獄谷方面に目を転じると、曲輪⑧～⑩は東ノ郭主要部から北側に伸びる尾根筋に位置し、①②の下位に位置する。主要部①②と下位の曲輪⑧～⑩の間は現在はかく乱が激しいが、可能性として主要部①から曲輪⑦を介して下りたとみられる[19]。

曲輪⑧・⑨は入部当初には煙硝蔵があったとされる曲輪である[20]。曲輪⑧は、前面を横堀ｈ２で断ち切り左右に凸状の櫓台ｃ５、ｃ６が築かれている。⑧の西側塁線上には土塁ｄ３があり塁線の真ん中に横矢掛かりが設けられた。曲輪⑨は小さな櫓台ｃ７がある。ｃ７は横矢掛かりを形成する隅部に配置されず、若干内側に構えられた。

曲輪⑧～⑩の西側には石垣列Ｉ１～Ｉ３が並ぶ。北西隅を占める櫓台ｃ６にある石垣列Ｉ１はｃ６の形状とかみ合っておらず、石垣を張り出させることに主眼を置いた障壁石垣と評価される。これと対象となる南

西隅にも障壁石垣Ｉ３が築かれており、西側斜面には障壁石垣を構えた強固な防御線が敷かれたと考えられる。二つの障壁石垣に挟まれた斜面には一～二ｍ高さの根石列が残る。

なお、この斜面に用いられた石垣は、［写真１］のように規格化された石材が多く比較的下った時代まで修築が行われていたことを窺わせる。その中で障壁石垣Ｉ３には相対的に古式な石材が使われており、［写真２］のように刻印が確認される。

左記の塁線は途中から小さな谷が貫入し内側に入り込んだ凹状地形となっている。塁線と石垣列の間にテラス状の帯曲輪が設定され谷から登り道が通じている。石垣列は登り道でＩ２とＩ３が食い違っており平入りの虎口ｋ８を形成する。登り道はテラス状の地形で曲輪⑨に入ったものと思われる。曲輪⑨にあるｃ７は、ちょうど折れ曲がり地点を牽制するように配置されている。攻め手は最初に西側から障壁石垣で牽制されながら虎口ｋ８に取り付かざるを得ず、仮に突破してテラス状の帯曲輪に入っても上部の曲輪⑩を成す凹状の塁線、特に櫓台ｃ７から狙い撃ちされる。虎口ｋ８は規模は小さいものの攻め手に対して効果的に迎撃する防御が施されていたことがわかる。

ところが、この虎口ｋ８は主な古絵図には描かれていない。南西側に現在も残る清水門（虎口ｋ９）は描かれてもｋ８の箇所は高石垣で表記されるなど門の存在はうかがい知れない。この位置に門があったことを記した古文書も管見の限り見当たらない。よって、縄張り調査から虎口ｋ８の存在を論じても文献史学などの側からは証拠がないと一蹴されるかもしれない。

しかしながら、縄張り調査から得られた見地をもとに改めて古絵図を見直すと、最も古い《正保岡城絵図》［図２］にこの位置に城門が描かれていることが確認できる［図８］。《正保岡城絵図》では、東ノ郭は上位の①～④と下位の⑧～⑨が侍屋敷で表記されている。侍屋敷の形状はデフォルメされた表記であるが櫓台の位置などからそれぞれ比定できる。一方、東中仕切から伸びる城道は中途で分岐して侍屋敷の脇を通り城門に通じている。この城門は、下位の侍屋敷に沿って櫓台と石垣壁が描かれている。この表記を［図７－２］にあてはめると櫓台はｃ６、石垣列はＩ１～Ｉ３、城門の位置は現在の清水門跡ではなく、虎口ｋ８と比定できる。即ち、《正保岡城絵図》が描かれた一六四〇年頃の二代藩主中川久盛の時代までは現在の清水門ではなくこの位置に城門があり地獄谷への出撃口として機能していたと推察される(21)。

ところが、城門ｋ８は、《正保岡城絵図》に続く《久清期城絵図Ａ》［図３］では既になくなっており、代わりに清水門から崖を下りて地獄谷へ出入りするように変更されている。この変更は、東ノ郭の直下の虎口を主郭部に続く尾根上に移動させることで、主郭（天神山）地区から地獄谷への出入り口であることを強調する意図があったと思われる。

以上、現存遺構の調査と古絵図を勘案した結果、築城当初には地獄谷の出撃口として城門ｋ８があり、その後、久盛期の正保年間から久清期の寛文年間までの間に主郭（天神山）地区に近い今の清水門に変更されたものと考えられる。

その「正保岡城絵図」に描かれた城門ｋ８へ通じる帯曲輪が⑪・⑫と考えられる。現在は途中に清水門ｃ８があり寸断されているが、埋め殺された石垣列Ｉ５の位置から当初は石垣壁が続いていたと推察される(22)。地獄谷に面した東中仕切から城門ｋ８間の北側塁線は、築城当初は高石垣で固めた長大な防御ラインであったと考えられる。

一方、東中仕切から下原門間の南側斜面には、城道に沿って高石垣を

築かれている。地形的に張り出した部分に沿って櫓台ｃ9、ｃ10、そして下原門が設定された長大な防御ラインとなっている。

縄張り分析を通して得られた東ノ郭の特徴をまとめると以下のようになる。

◎東ノ郭は、中川（田近）氏屋敷を起点に下原門を含む連続した外桝形虎口が大手を形成する。又、地獄谷側に曲輪と高石垣を構えるなど主郭（天神山）地区に匹敵する規模と技術水準を示す。東ノ郭は、主郭（天神山）に対し「一城別郭」とも言える城郭の様相を示す。

◎下原門は、形式上は豊後岡城の出入り口であると共に、中川（田近）氏屋敷から繰り返し鉤の手状に屈折する連続外桝形虎口としても機能した。入部当初は下原門は中川（田近）氏が受け持つ東ノ郭の主要虎口の役割が強かったと位置づけられる。

◎城門ｋ8は東ノ郭から地獄谷への出入り口として機能した。後に、清水門に移転することで東ノ郭の虎口の機能が否定され、主郭（天神山）地区から地獄谷への出入り口に変更された。

◎東ノ郭では櫓台や障壁石垣など様々な技法が駆使された。また、弱点となる出入り口も出撃を想定した技巧的な虎口が採用されるなど、高石垣や長大な塁線で処理する傾向の豊後岡城にあって、細かな実戦的意図に基づく縄張り技術が駆使された。

縄張り調査の結果、東ノ郭は連続する桝形虎口や櫓台などを備えるなど、主郭（天神山）と同程度の規模と水準の縄張りを持つ「一城別郭」の城郭として機能したことが明らかになった。

3、豊後岡城の主郭（天神山）地区、西御郭地区の縄張り

東ノ郭に対して、豊後岡城の中心を構成する主郭（天神山）地区と西側に広がる西御郭地区の縄張りを検討する。従来、豊後岡城の主要部と認識され、現在も屋敷地を中心に整備が進められている区域である。縄張りの検討にあたっては従来の史跡測量図を用いた［図9］(23)。

主郭（天神山）地区は独立した天神山を造成して築かれた総石垣の城郭である。天神山の南北は切り立った崖であり、東西は琵琶首状に狭まる痩せ尾根となっている。入部当初、中川氏が志賀氏時代の岡城にあたる東ノ郭ではなく天神山を主郭にしたのは、東西の痩せ尾根を仕切れば周囲から隔絶した強固な防御施設が構築できるからだと思われる。

中川氏は外桝形虎口を備えた中仕切を琵琶首状に狭まる地点に合わせて築いている。特に、西中仕切は地形的に密集せざるを得ない攻め手に効果的な打撃を加えて混乱させた上で、外桝形虎口から出撃して撃退することをねらったものである。

天神山の主郭部は本丸・二の丸・三の丸と称される三つの区画に分かれる。この他、測量図には図化されていないが北東側の地獄谷に石垣で固めた井戸曲輪が確認される。本丸の南西隅にある三重櫓跡地点が三二一・八五ｍで最も高い。《岡城本丸平面図》（竹田市立図書館蔵）［図10］をみると、石垣の上は多聞が連なり隅角部に三重櫓（御三階）、角櫓、御金蔵が固められた。その中に本丸御殿が営まれた。本丸の出入り口は北側の一ヶ所にある。地形的制約から平入り虎口であるが多聞と一体化した御門櫓であった。本丸は高石垣を配し多聞や櫓などの建造物で固めるなど防御に専念した縄張りと位置づけられる。

本丸に対して、二の丸・三の丸は主郭の第二郭として機能した。二の丸と三の丸との間は石垣の段で仕切られ冠木門が築かれた。この門は他の城門に比べて形式的なものであり、二の丸と三の丸は地形的な連続した位置づけにあったとみられる。但し、冠木門には常に上方の角櫓から

牽制できるようになっている。二の丸は常に本丸に抑えられた下位曲輪の位置付けにあったとみられる。

一方、三の丸は二方向に虎口を構え兵力を押し出すことを意識した曲輪である。西・南側壁面は多聞で固められ、御門櫓と太鼓櫓門の二つの出入り口が構えられた。曲輪内は北西側に寄って三の丸御殿が営まれた。土塀により逆Ｌ字に通路が設定されており、仮に太鼓櫓門を突破し三の丸に攻め手が侵入しても三重櫓で待ち構えることを想定した縄張りとなっている。

御門櫓は南側の多聞とつながった平入り虎口の門である。本丸南西隅の三重櫓の直下に位置する。三重櫓は東西中仕切の通路を牽制する位置にありこの方面の侵入を迎撃する役割を担う重要な位置を占める。三の丸御門櫓は東西の仕切門から侵入した攻め手を撃退するための出撃口であったと思われる。

太鼓櫓門は大手に相当する巨大な門で鏡石がみられる。太鼓櫓門の内側は二折れの内桝形虎口となっており、仮に門が破られても三の丸から囲い込み押し返すことを意図したプランである。一方、太鼓櫓門の外側正面は、鉤の手状の石垣塁線と西中仕切の石垣塁線により二折れの外桝形虎口が連続する強固な虎口プランとなっている。西中仕切と太鼓櫓門を介して組織的な迎撃体制が計画されていたことが見て取れる。

以上のように、主郭（天神山）地区の縄張りは、本丸を起点に二の丸・三の丸、太鼓櫓門から東西の中仕切に到るまで〈迎撃→出撃→撃退〉という組織的防御を念頭に、虎口と曲輪、櫓台などの構成要素を巧みに組み合わせた縄張りであることがわかる［図11］。主郭（天神山）地区を普請した中川氏が豊臣系大名の一員として桝形虎口に代表される織豊系城郭の縄張り技術を使いこなす勢力であったことを示す。

主郭（天神山）地区と対称的に、西中仕切の外側は屋敷地が集約した台地上の大味な空間となっている。その縁辺部を高石垣や横堀を多用した外郭ラインが囲い込む形式となっている。崖の上に築かれた外郭ラインが総構えを形成し、その内側に大身家臣の屋敷地を囲い込むことで、強引に曲輪として編成したものと位置づけられる(24)。

西御郭の総構えには様々な縄張り技術が駆使された。桜馬場の南側には的場～中休所～古大手門まで横矢掛かりを伴う土塁ラインが配され、眼下の滑瀬方面を牽制する役割を果たした。また、測量図には図化されていないが、近戸門から中川（古田）氏屋敷の北側に石垣壁に沿って巨大な横堀が掘られた。豊後岡城の中では横堀は東ノ郭⑧にみられるが、長大な横堀の使用は珍しい。この横堀の先には久盛期に建立された願成院のあった尾崎が位置する。横堀を設けることで、攻め手の足場となりやすい尾崎からの侵入を遮断する意図が見て取れる(25)。

外郭ライン上には外桝形虎口の大手門（改修以前の古大手門は平入り虎口）や近戸門が築かれ西側の出入り口となった。下原門や両中仕切など出入り口からの出撃を強く意図した東側の主郭（天神山）・東ノ郭に対して、西側は出入り口を総構え上に設定したように、防御と遮断を優先させた区画であったことがわかる。

総構えの内側に屋敷を構えた勢力をみてみると、既に述べたように、東側の東ノ郭地区は入部当初に中川氏が中川（田近）氏に一任するかたちを採っており、中川（田近）氏は「一城別郭」の城郭のような屋敷を構えていた。これに対して、「不染斎随筆」や「諸士系譜」（豊後岡藩中川家文書）等の記述から、西側の西御郭地区は複数の大身家臣に分け与えたことが確認される。具体的には、老職を務めた中川（熊田）氏や中川（古田）氏、中川（戸伏）氏の他、田近氏（長祐と別系統）、森田氏

（清秀の異父兄の実家）、上島氏、萱野氏らが屋敷を構えていた。織田氏の与力であった古田氏を除くと、彼らは清秀以来の親族や摂津国衆出自の大身家臣である[26]。

三代藩主の久清が西御郭の大改修を施すまでには、東ノ郭の中川（田近）氏を含む大半の勢力は城外へ移転させられたが、中川（古田）氏・中川（戸伏）氏は幕末まで屋敷地を城内に保持した[27]。

東ノ郭の調査結果に主郭（天神山）地区、西御郭地区の縄張りを踏まえて、豊後岡城の縄張りについて位置づけると以下の通りである。

豊後岡城は、技巧的な織豊系城郭の縄張り技術が全体に共通して駆使される点では一体性を持つが、曲輪配置については東ノ郭・主郭（天神山）と、総構えとなる西御郭の三地区が、南側の帯曲輪状の城道を介して横並びに連なる構成を採る。そして、下原門と主郭（天神山）地区の前後に設けられた両中仕切、大手門により三地区がそれぞれ仕切られるなど、主郭への求心性が弱い縄張り構造となっている。中でも、主郭（天神山）と東ノ郭は、地獄谷を挟んで対を成す並立した曲輪配置となっており注目される。主郭（天神山）は、三重櫓や多聞、御殿などの建造物、高石垣と東西中仕切に配した桝形虎口を備えることで相対的に東ノ郭より上位曲輪と位置付けられたが、両地区の縄張りは機能的にはかなり似た構造となっている。

以上のことから豊後岡城は、連続する外枡形虎口を備えた主郭（天神山）と東ノ郭が城郭部分を構成し、その西側に広い屋敷地を囲いこむ総構えが連なる縄張りであったと評価される。

三、東ノ郭からみた豊後岡城の縄張り構造と初期中川家の存在形態

本節では、特徴ある縄張りを創出した築城主体の中川氏について、大身家臣の中でも抜きん出た中川（田近）氏との関係から検討を加える。

縄張り調査から明らかになった東ノ郭の様相は、従来の「御廟所跡」とは全く異なり、中川（田近）氏屋敷を主郭とする半ば独立した「一城別郭」の城郭そのものであった。重要なのは、これらの分析結果が従来の遺構の見落としを指摘するというレベルではなく、東ノ郭の位置づけを通して従来の豊後岡城の位置づけの変更を迫る新たな見地をもたらすことにある。

東ノ郭は中川（田近）氏屋敷が退去し近世後期には御廟所が置かれるなどその機能を低下させたこともあり、［図7－1］の調査図にあるように、これまで城内としての位置づけは低かった。周囲に残る遺構も中世岡城を偲ぶものとして重視されていなかった節がある。

ところが、［図7－2］のように東ノ郭の縄張りが明らかになると豊後岡城の様相は大きく変わる。つまり、主郭である天神山に隣接して主郭（天神山）と同規模・同水準の縄張りを持つ東ノ郭が並列していたことになり、豊後岡城の中心部は主郭（天神山）と東ノ郭がそれぞれ東西外側に向けて主要虎口を構え、互いの方向へは帯曲輪で一体化するなど、対で機能するような曲輪配置であったと位置づけられる。

豊後岡城にみられるような主郭（天神山）と東ノ郭の関係は、当主への求心性を階層的な曲輪配置に求める近世城郭としては特異な様相である。入部当初の中川（田近）氏は、西御郭に屋敷を構えた他の大身家臣から抜きん出た存在であるばかりでなく、中川氏当主に相当するような地位と力量を持っていたことが読み取れる。従来、文献史料から入部当初、中川（田近）長祐が東ノ郭を自らの手勢で抱えるように秀成から命じられたことは知られていたが、今回の縄張り調査では、そうした中川（田近）氏の力量が実際に遺構からも具体的な形で示すことができた。

即ち、中川氏入部当初の豊後岡城では、当主が構える主郭（天神山）地区から目と鼻の先にある東ノ郭に大身家臣の中川（田近）氏が半ば独立したかたちで主郭（天神山）と同規模・同水準の城郭を構える特異な光景が展開していたのである[28]。

一方、西御郭地区の大身家臣の屋敷についても、中川（古田）氏屋敷や［図３］［図４］などの古絵図から、屋敷内に櫓台や平入りの門を構えるなど一定の独自性を保持していたことが見て取れる。それでも東ノ郭の中川（田近）氏のように自前で桝形虎口を構えるような半ば独立した様相は確認されない。今日残る中川（古田）氏屋敷跡も西側を近戸門への城道が堀切のように仕切るなど地形的には独立したかたちを示すが、開口部は平入り状の門に留まっている[30]。西御郭地区の大身家臣の屋敷の様相と比べても、入部当初における中川（田近）氏の自己裁量の大きさが目立つ。

以上のような豊後岡城の縄張り分析を踏まえて、筆頭家老中川（田近）氏の足跡を周辺資料から検討してみる。

中川（田近）氏の初期の動向については、残念ながら当該時期の家譜が失われており、「中川氏御年譜」などから関連する記述を集める以外にない。田近長祐はもともと摂津国豊島郡で田近党と称する在地諸勢力の一員であったとされる。永禄一一（一五六八）年に長祐が中川清秀に属しこれ以降中川家中に参加する。長祐は清秀の外戚にあたる熊田（熊野田）氏や戸伏氏と共に老職となり、次第に家中で頭角を現した。天正七（一五七九）年に織田方の北摂攻めに清秀が参加した際に、長祐は北摂の諸城を無血開城させた功績で織田信長より賞され、清秀から中川の苗字を与えられ中川平右衛門を名乗ったとされる。

清秀が賤ヶ嶽で戦死した後は、長祐は羽柴（豊臣）秀吉から秀政の後見を命じられるなど他の老職とは別格の扱いを受けている。また、天正十一年の秀成分知の際には、長祐は熊田・戸伏らと共に秀吉から二千石の朱印状を受けており、秀政戦死後の秀成への家督継承の際には豊臣氏側との折衝役として動いている。このように、中川（田近）氏は豊臣政権と直接のつながりを持つなど家中で自立した動きを示した大身家臣であった[29]。

文禄三（一五九四）年の豊後国入部の際には、長祐は子の長種と共に六千石の石高を持っている。入部時の中川氏の知行高は六万六千石（無役分、一万六千石）である。それと比べると中川（田近）氏の石高は全体の十一分の一である。与力で付けられた田原紹忍（二、九一三余石）らと比べても、中川（田近）氏の抜きん出た大身ぶりが窺える。主郭（天神山）地区に対して半ば独立した縄張りを持つ東ノ郭のあり方は、初期の中川家中における中川（田近）氏の地位の高さを如実に裏付けるものと言える。

中川（田近）氏のように大名当主に対して自立した動きを示し独自の裁量を振るった大身家臣は、鍋島氏や島津氏、相良氏ら旧族大名と呼ばれる勢力に多く見られる。その中では肥前佐賀城などのように当主の居城内に自立性の高い区画を構える事例がみられる。これに対して、黒田氏・加藤氏・田中氏などの豊臣政権の中心にいる大名の場合、所領の急激な拡大による大身家臣の創出や支城主への転身を除くと、大身家臣が当主の居城内で独自の裁量を縄張りにまで反映させることは少ない。

それでも、中川氏のように畿内での織田氏領国の拡大過程で参画した大名の中には、在地で糾合した国衆・地侍との関係が再編されないまま織田・豊臣系大名として「織豊化」を果たした勢力がみられる。その場合、東ノ郭にみられるように大身家臣も当主と同様に「織豊化」の洗礼

を受けた可能性が高いが、この場合でも、支城主として転身しない限り独自の裁量権を城郭の縄張りという目に見える形まで発揮することは稀であった(30)。

その意味では、当主を頂点に織豊系城郭の縄張り技術が駆使された近世城郭の枠組みの中で、豊後岡城は大身家臣の中川（田近）氏の高い自立性が「一城別郭」というかたちで反映された希有な事例と位置づけられる。当主が相次いで戦死した中川氏の特殊事情と、摂津国での国衆・地侍連合の性格を家中に温存したまま早い段階に転封、居城の築城を行ったことが、彼らの本貫地、畿内を系譜とする在地色の強い気風を豊後岡城の縄張り構造に投影させることにつながったと言える。

東ノ郭の縄張りが判明することで明らかになった豊後岡城の主郭（天神山）と東ノ郭の関係は、豊臣系大名である中川氏家中の枠組みに従いながらも筆頭家老として自立した動きをみせる中川（田近）氏と、そうした大身家臣を抱えながら当主権の行使を図らざるを得ない中川氏という、初期の藩政確立期における当主と大身家臣双方の微妙な関係が如実に現れたものとして貴重である。従来、豊後岡城と言えば、石垣ばかりが注目され整備されてきたが、入部当初の中川氏の家中構成から創出された特徴ある縄張り構造こそが、同時代に多く築かれた近世城郭の中で際立つ特徴と位置付けられる。

終わりに

以上、長年にわたり整備が進められている豊後岡城を題材に、未整備な東ノ郭の縄張り調査を行うことで従来と全く異なった入部当初の豊後岡城の様相を示すことができた。それは、中川氏当主の主郭（天神山）と中川（田近）氏の東ノ郭が対になって城郭部分を構成し、大身家臣の屋敷を外郭ラインで囲む総構えとして処理した西御郭が連なるという、従来の解釈とは異なる姿であった。そして、豊後岡城の縄張り構造は、畿内を系譜とし在地色の強い気風を内部に抱えた中川氏の家中構成を反映したものと位置付けた。

一般論として、城跡の実態を把握するには、机上の資料調査に勤しむよりもまずは野外にある実際の遺構について地表面観察と縄張り調査を行うことが重要である。東ノ郭を調査し縄張り図を作成することで豊後岡城の新たな見解が得られたように、ベースマップとなる縄張り図の作成と総合的な資料解釈と遺構評価に基づく縄張り研究の視点が城跡整備に欠かせないことを示せたと思う。

筆者は以前に佐賀県鳥栖市の肥前勝尾城にて同様の縄張り調査を行い、当時、国指定史跡登録を目指していた鳥栖市教育委員会に寄与したことがある。その際には、担当者のみならず市民の皆さんに様々な形でお世話になり、皆さんに成果の報告を通して中近世城郭跡の資料としての位置づけを紹介することができた。今回の国指定史跡「岡城跡」の場合も新たに得られた調査成果が今後の史跡整備に少なからず寄与できれば幸いである。

なお、豊後岡城の調査や資料収集にあたっては、所蔵元の各関係機関の関係者及び、地元の方々や城郭談話会、「岡城阯研究会」の諸兄に様々な便宜・助言を頂いた。末尾ながら感謝いたします。今回の調査を通して、史跡の整備保存は限られたプロパーの間で行うものではなく、学究の世界から市民まで幅広い方々の参加を通して成り立つものであることを教えられた。今後ともそうした方々のご協力を賜りながら縄張り調査を行い、遺構そのものの分析を通して豊後岡城の解明に努めたいと思う。

また、豊後岡城の縄張り構造からみた中川氏、及び岡藩の実態について

明らかにしていきたい。

補註

(1) 各地の城跡でそうした例がみられるが、平成一八年度現在、豊後岡城の場合でも整備委員の中に縄張り調査を用いる城郭研究者は管見の限りみられない。（『史跡岡城跡、平成18年度史跡岡城跡保存修理事業報告書』［竹田市教育委員会、二〇〇七年］）

(2) 城郭史研究における考古学サイドからのアプローチとしては織豊期城郭研究会の一連の活動が挙げられる。研究会誌として『織豊城郭』がある。しかしながら、通常の遺跡は後世に埋没するため発掘調査による層位学的な解釈や遺構・遺物の検出が有効であるが、城郭跡の場合、地表面を削平して新たな城郭が普請されることが多く後世に遺構が残りにくい性格を持つ。逆に地表面観察である程度の成果が得やすいことから縄張り調査が有効となる。埋蔵文化財調査が限られることや発掘成果の再検討が難しいことを踏まえると、縄張り調査など学際的に研究手法を組み合わさないと考古学サイドからの研究の深化は難しいと思われる。

(3) 豊後岡城の例として［豊田一九八五］を挙げておく。

(4) 三浦正幸『城の鑑賞基礎知識』（至文堂、一九九九年）などが好例。

(5) 城郭研究者による解説以外では、基本的には今日まで豊後岡城の一般向けの解説は［北野一九八五］の影響が大きい。ちなみに、御廟所跡（東ノ郭）と本丸（主郭部）の高さはほとんど変わらず、縄張りも大きな違いがないにも関わらず、前者は山城的、後者は平山城的と評価されている。このことからも山城型と平山城型には様式的な違いはなく、判定者の主観に負うところが大きいことがわかる。なお、本論の縄張り調査で示したように東ノ郭（御廟所跡）は大きく改修されており、中世期の様相をみるのは難しいだろう。

(6) 村田修三は、縄張り調査に基づく城跡調査の手法を歴史学研究に持ち込み、戦国期における中間層の分析視点として「城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」と提唱した［村田一九八〇］。そして、縄張り図の作成と資料論の構築を通して縄張り研究の理論的整備を進めたのが千田嘉博である［千田二〇〇〇］。この時期に相次いで城跡の資料化と城郭史研究は進展し、全国各地で地道に行われてきた縄張り調査の集約化が図られた。縄張り研究者は中世史サイドの研究者が多く、中世城郭から織田氏領国を中心とした織豊系城郭に関心が集まる一方で、豊臣政権以後の近世城郭に関心が広がるには若干遅れたきらいがある。

(7) 関西の城郭談話会は、縄張り研究を軸にひとつの城に多角的な研究を加えて一冊の冊子を作成する学際的調査を行っている。これまで『但馬竹田城』（一九九一年）、『播磨利神城』（一九九三年）、『淡路洲本城』（一九九五年）、『因幡若桜鬼ヶ城』（二〇〇〇年）、『大和高取城』（二〇〇一年）、『大和筒井城調査報告』（二〇〇四年）、『近江佐和山城・彦根城』（二〇〇七年）が刊行されている。各地でこうした学際的調査の導入が期待される。また、九州・山口など西南日本では、木島孝之が慶長期の近世城郭の本城・支城体制に着目し詳細な調査を行い、城跡の資料化と社会的様相の考察を積極的に進めた。［木島二〇〇一］

(8) 調査時には中川（古田）氏屋敷跡の平面復元が進められていたため、屋敷跡の北側にある空堀や東側の堀切、櫓台などの縄張り図作成ができなかった。筆者の個人的な見解ではあるが、地表面観察による微地形の評価を踏まえず整備すると今回のような下原門周辺の外桝形虎口

なども確認されずに改変される恐れがある。それだけに、今回はやむを得なかったが、早い段階に桜馬場から大手門・近戸門を通る外郭ラインを中心に縄張り図の作成を行う必要がある。

(9) 東ノ郭の呼び名は「中川家御年譜第三」（『中川氏御年譜』［竹田市教育委員会二〇〇七］）文禄三年の項に「東ノ郭志賀湖左衛門親次カ旧館ヲ……」とある。一方、西側の屋敷群を指すものは確認できていない。明和の大火時の報告に「外曲輪」という呼称がある「中川家御年譜付録第七」（『中川氏御年譜』［竹田市教育委員会二〇〇七］）が判然としない。便宜上、西御郭の呼称を当該地域を指すものとして西の丸と区別して用いた。

(10) 「志賀家文書」は戦災で消失しているが東京大学史料編纂所に印影本が所蔵されている。戦国期直入郡の史料集成としては渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成、七下』（別府大学、一九九三年）がある。

(11) 九〇年代以降、知覧城（鹿児島県南九州市知覧町）人吉城（熊本県人吉市）や肥前名護屋城（佐賀県唐津市鎮西町）、角牟礼城（大分県玖珠町）など九州各地で縄張り調査など城郭史研究の手法を導入した史跡整備がみられる。しかし、豊後岡城ではそうした動きはこれまでみられず、現在は「豊後岡藩中川家文書」の全文翻刻を進めるなど文献史料から遺構の性格を明らかにしようとする意欲的な試みを進めている。ただ個人的な見解であるが、史跡整備・公開の観点に立つならば、文献調査で石垣などの字面を追う前に、縄張り調査を導入した豊後岡城の史跡調査、及び再評価が必要と思われる。今回新たに確認された東ノ郭下原門に続く桝形虎口は、従来の豊後岡城の位置付けについて修正を迫る重大な問題である。改めて従来の測量図による評価に検証を加え、下原門での桝形虎口の確認を以て問題点を指摘するとともに、安易な研究利用の注意喚起をしていかなければならない。そして同時に原点に立ち返って、豊後岡城の縄張り調査を行うことによって、遺構のありのままの実像を広く明示する必要があると考えられるのである。安易に文献史料に頼らず、現存する遺構の検証から文献史料には残らない当該期社会の様相を提示することが史跡公開・活用の求められる姿ではないだろうか。

(12) 竹田の郷土史研究では図書館長を務めた北村清士の精力的な活動がある。『中川史料集』［北村一九六九］のように早い時期に岡藩の基礎史料を出版社から刊行した意義は大きい。ところで、『中川氏御年譜』解題では、氏の労作とする『中川史料集』について、底本とした文化版「中川家御年譜」に編者による史料操作の一例を指摘している。［竹田市教育委員会二〇〇七］もっとも、最初に翻刻する場合には藩政期に編纂された御年譜を選択する方が自然であるし、一方で、新たに底本とした幕末維新版に同様の史料操作がないとも言い切れない。その意味では、先行研究の問題点を喚起して四〇年後に刊行された労作に、文化版と幕末維新版の違いなどの校訂作業がないのが惜しまれる。

(13) 佐伯治「「天下の嶮城」と賛えられた城」（豊田寛三編『図説海部・大野・竹田の歴史』［郷土出版社、二〇〇七年］）でも同様の表現があることからも窺える。

(14) 中川家の所蔵文書の変遷については菅原憲二「解題」［菅原一九九四］が詳しい。現在、主要な古文書、朱印状などの史料群は神戸大学文学部にあり、『中川家文書』［神戸大学文学部日本史研究室一九八七］として翻刻されている。一方、「豊後岡藩中川家文書」は幕末明治以降の家文書に加えて、「中川家御年譜」などの編纂史料が多数所蔵されている点が特徴である。これらの史料の内、「中川氏御年譜」が近年

翻刻された。［竹田市教育委員会二〇〇七］

(15) 国立国会図書館所蔵「日本古城絵図」は、貴重画像データベースで公開されている。

(16) 縄張り研究の手法と課題については、木島孝之「本編序論」（［木島二〇〇一］所収）に簡潔にまとめられている。

(17) 「中川家御年譜第三」（『中川氏御年譜』［竹田市教育委員会二〇〇七］）

(18) 古田広計「不染斎随筆、五」（竹田市立図書館蔵）。「豊岡古人話集」（大分県立図書館印影本）では、中川（田近）氏は東ノ郭の屋敷を区画して本家と分家で屋敷を構えていたと記す。また、中川久清隠居後の豊後岡城古絵図《入山期岡城絵図》［図5］をみると、東ノ郭は中川（田近）氏本家と廟所が描かれている。これらのことを勘案すると、中川直高改易後の屋敷地を接収して御廟所が営まれたと推察される。

(19) 曲輪①から下位曲輪へ下りるルートは御廟所時代以降の改変がありわからなくなっている。曲輪⑦を介して下りたものと思われるが、古絵図類では曲輪②と下位曲輪が一体に描かれた場合が多く、曲輪②からのルートがあった可能性も考えられる。

(20) 「不染斎随筆、後追加」（竹田市立図書館蔵）に、「御軍用御手當ノ塩硝庫文禄御入国ノ頃ハ下原御門ノ内ニアリシニ入山公御代御廟御普請アルニ付下原今ノ安威右近衛門屋敷ノ下通り大道上ノ方ニ御ウツシニナリ……」とある。中川久清の代に東ノ郭が大きく改変されたことがわかる。中川久清期の豊後岡城再編については、豊後岡城の縄張り調査を進め、別稿を立てて詳細に検討したい。

(21) 《正保岡城絵図》だけの読み込みでは、門の位置はデフォルメされている可能性が考えられたが、縄張り調査による遺構の確認と照合することで清水門と異なる門であることが確認できる。縄張り調査を踏まえた上で文献史料や古絵図を調査することの有用性を示す一例である。

(22) 地表面に石列が出ているなどの縄張り調査の結果から予見を立てているが、可能ならばトレンチを入れるなどの確認調査を望みたい。国指定史跡なので発掘調査には大きな制約があると思われるが、縄張り調査の見解をもとに必要最低限の発掘調査を行うことで最小限の破壊で有益な情報が得られる。こうしたプロセスも史跡整備を行う上では欠かせないのではないだろうか。

(23) 『史跡岡城跡、平成13・14年度史跡岡城跡保存修理事業（災害復旧）報告書』（竹田市教育委員会、二〇〇三年）所収第二図を用いた。なお、この図では東ノ郭地区の北側遺構や西御郭地区の北東部遺構、主郭（天神山）の二の丸下の井戸曲輪、西仕切門側の土塁の折れといった縄張りの基本的な部分が表現されていない。この点からも早急な縄張り調査による図化の必要性を指摘しておきたい。

(24) 地形上の制約はあるものの、仮に西中仕切と大手門の間の桜馬場を横堀で仕切り虎口を設定するならば、大手門まで主郭（天神山）から求心的な曲輪配置を確保することができる。にも関わらず、豊後岡城の場合は主郭から求心的な曲輪配置は西中仕切で留まっている。そのため、主郭（天神山）と西御郭地区が横並びになり、主郭への求心性は低い。

(25) 北の尾崎の願成院跡を搦手とする解釈がある［豊田一九八五、一九九四］。しかしながら、外郭ラインに沿って巨大な横堀を設けることはこの方面を遮断する意図に基づいたものであり、北の尾崎は豊後岡城と分けて考えるべきであろう。なお、この横堀を中世期の遺構と解釈する向きもあるが、豊後国内には同様の事例は皆無であり中世期に豊後岡城

のみに突出して現れたとするのは無理がある。

(26)「諸士系譜」（「豊後岡藩中川家文書」竹田市立歴史資料館保管）

(27)中川久清は、中川（田近）氏や中川（熊田）氏には改易も辞さぬ態度で臨み城外移転を断行している。その一方で中川（戸伏）氏は城内移転、中川（古田）氏は当初の屋敷地のまま城内に屋敷を構えることを容認している。老職に対する硬軟合わせ持った対応は一七世紀の当主権確立過程で広く見られた現象である。但し、岡藩の場合、城内屋敷の移転断行は他家に比べて遅く寛文年間まで達成できていない。豊臣氏に近い近世大名でありながら当主権の確立が遅いことが中川氏の特徴のひとつである。

(28)同様の事例としては、豊前小倉城（細川氏）の松井氏屋敷が挙げられる（「補注編、2細川領」［木島二〇〇一］所収）。松井氏は室町幕府の奉公衆を出自とし細川氏と同盟関係にあった存在である。細川家中にありながら幕府領代官を務めるなど自立性は高い。一六〇一（慶長六）年に豊後杵築城主、細川氏の肥後転封後に肥後八代城主となる。（『松井家三代―文武に生きた人々』［八代市立博物館未来の森ミュージアム、一九九五年］）。

(29)「中川氏御年譜第三」「中川氏御年譜附録第三」（『中川氏御年譜』［竹田市教育委員会二〇〇七］）

(30)筆者が以前に調査した小牟礼城（現、豊後大野市朝地町）は織豊系城郭の縄張り技術が施されており、岡藩内の支城として機能したものと考えられる。城主は不明であるが、近くに中川（田近）氏屋敷が確認されることから中川（田近）氏の可能性が考えられる。（『大分県文化財調査報告書第一七〇輯、大分の中世城館第四集総集編』［大分県教育委員会、二〇〇四年］）

主要参考文献

北村清士『中川史料集』（新人物往来社、一九六九年）

『詩情豊かな岡城物語』（私家本、一九七四年）

木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』（九州大学出版会、二〇〇一年）

北野　隆「岡城跡の城郭建築」

（『昭和五九年度史跡岡城跡保存管理計画策定事業報告書』［竹田市教育委員会、一九八五年］）

神戸大学文学部日本史研究室編『中川家文書』（臨川書店、一九八七年）

菅原憲二『豊後岡藩中川家文書目録』

（一九九二～九三年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）報告書、一九九四年）

千田嘉博『織豊系城郭の形成』［東京大学出版会、二〇〇〇年］

竹田市教育委員会『岡藩絵図資料編』（一九八五年）

『中川氏御年譜』（二〇〇七年）

田北鎮義「豊岡古人語集（古人語傳聞書）」

（古庄九陽寫「豊岡古人語集」大分県立図書館福写本、所収）

豊田寛三「岡城跡の造営と修築（歴史的考察）」

［『昭和五九年度史跡岡城跡保存管理計画策定事業報告書』（竹田市教育委員会、一九八五年）］

「岡藩、その概史と編成」（『三宅山御鹿狩絵巻』［京都大学学術出版会、一九九四年］）

中西義昌「豊後直入郡岡城の縄張り構造」

（『一九九九年度日本建築学会九州支部研究報告書』［日本建築学会、一九九九年］）

中川幻間「中川氏御先祖并御一門覚書」
（「金城秘鑑（仁）」大分県立図書館複写本、所収）
村田修三「城跡調査と戦国史研究」［『日本史研究二一一』、一九八〇年］
「両郡古談」（前田多三郎編『両郡古談』［九皐書院、一九三四年］）

主要参考古絵図

《豊後直入郡岡城絵図》内閣文庫［諸国城郭絵図］一六九－〇三三五、五八
（国立公文書館蔵）
《豊後国南部岡城之図》［日本古城絵図］西海道之部　三四一
（国立国会図書館蔵）
《豊後国岡城図》［日本古城絵図］西海道之部　三四二
（国立国会図書館蔵）
《豊後国岡城之図》［日本古城絵図］西海道之部　三四三
（国立国会図書館蔵）
《城中より各屋敷への道筋》（竹田市立図書館蔵）

［追記］今回、『大分県地方史』ではなく、筆者と縁もゆかりもない別府大学史学研究会『史学論叢』に縄張り研究の論考を投稿しようと思ったきっかけは、別府大学に全国でも数少ない城郭史関係の研究室があることが挙げられる。拙稿が同大学における城郭史研究（縄張り研究）、及び城郭史研究者の広がりに少しでも寄与できれば幸いです。今回、投稿の機会を頂いた白峰旬別府大学准教授に末尾ながら感謝いたします。

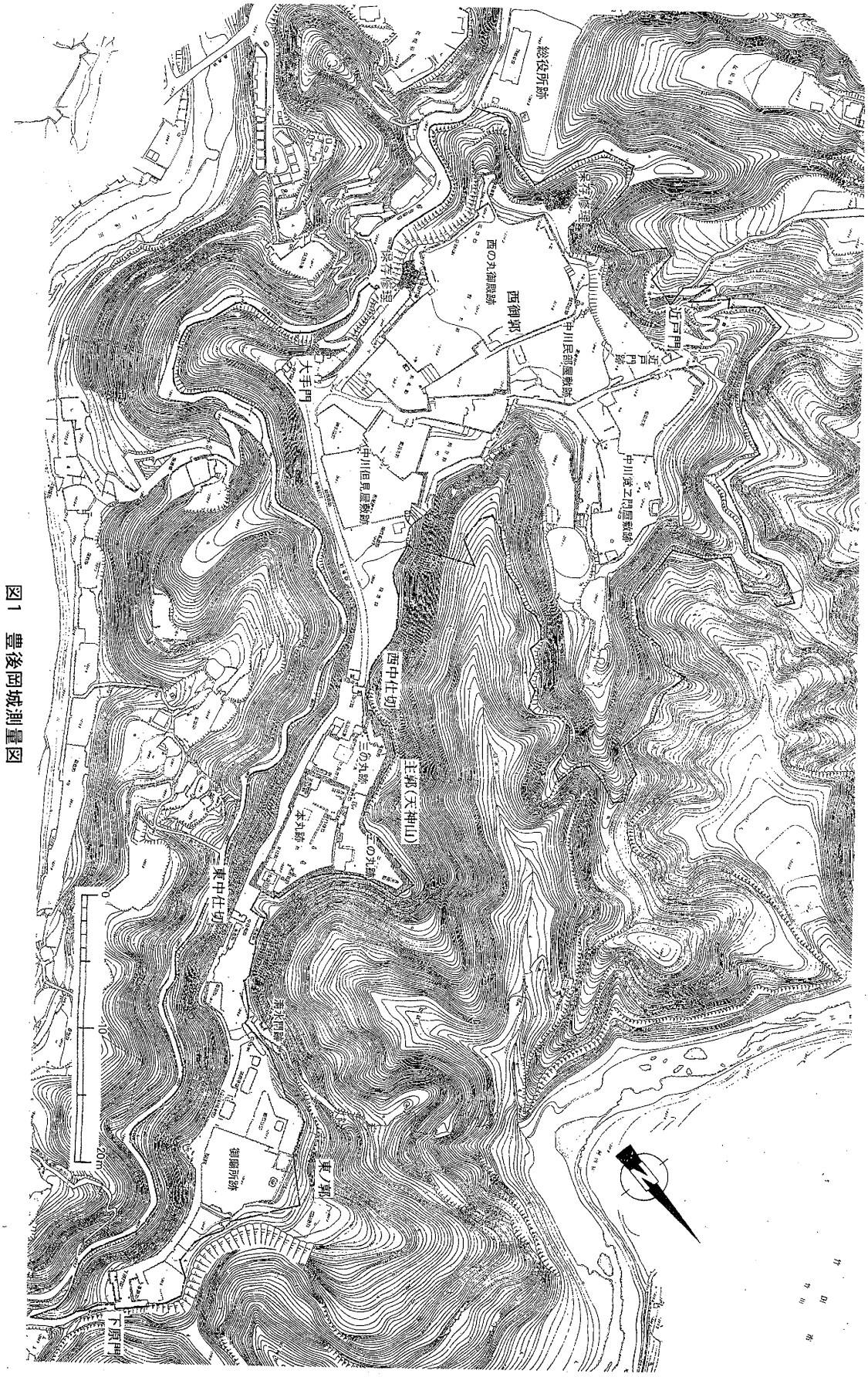

図1　豊後岡城測量図

『平成13・14年度史跡岡城跡保存修理事業（災害復旧）報告書』所収第2図に加筆

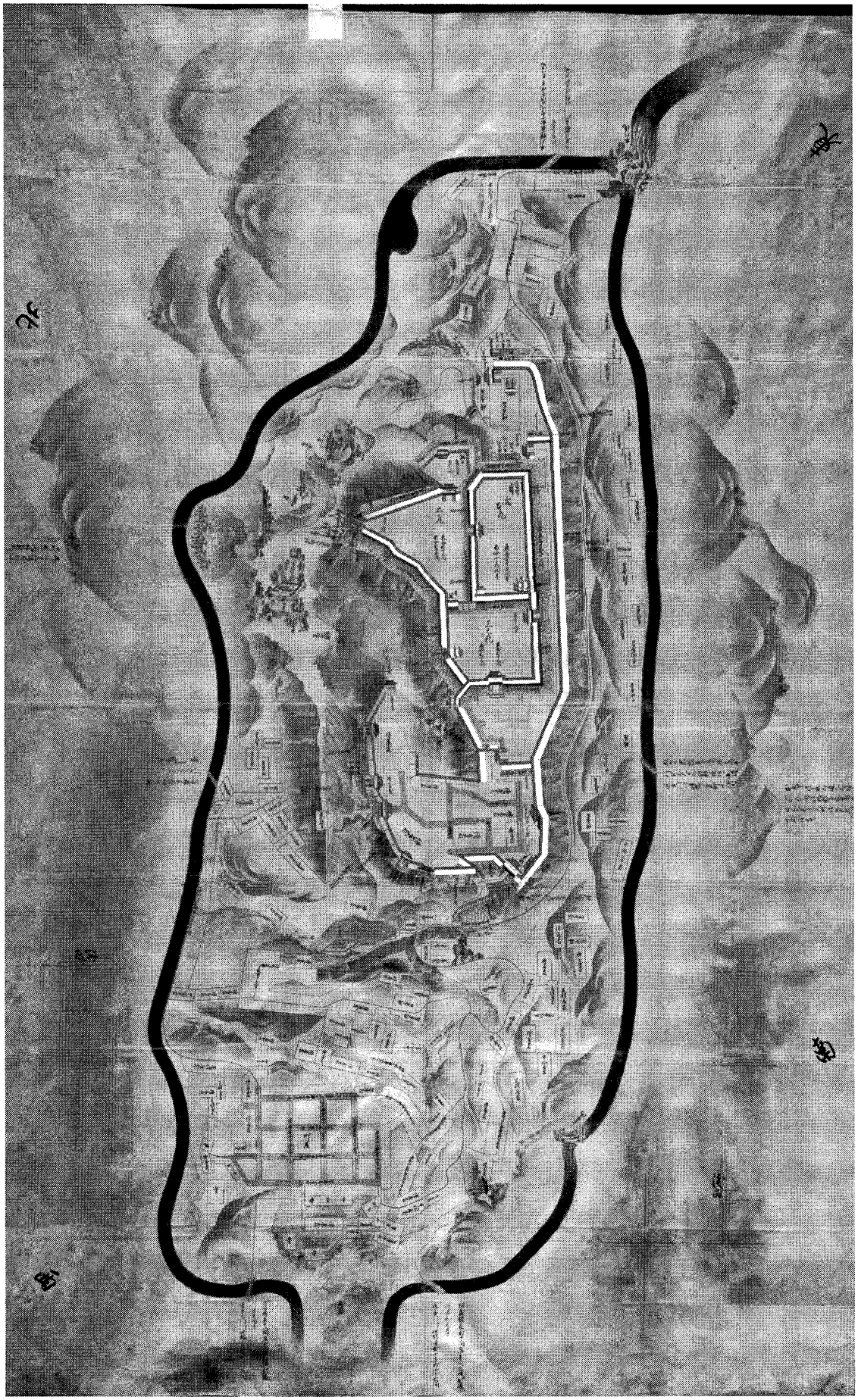

図2 《豊後直入郡岡城絵図》 国立公文書館蔵（[諸国城郭絵図] 169-0335,58）

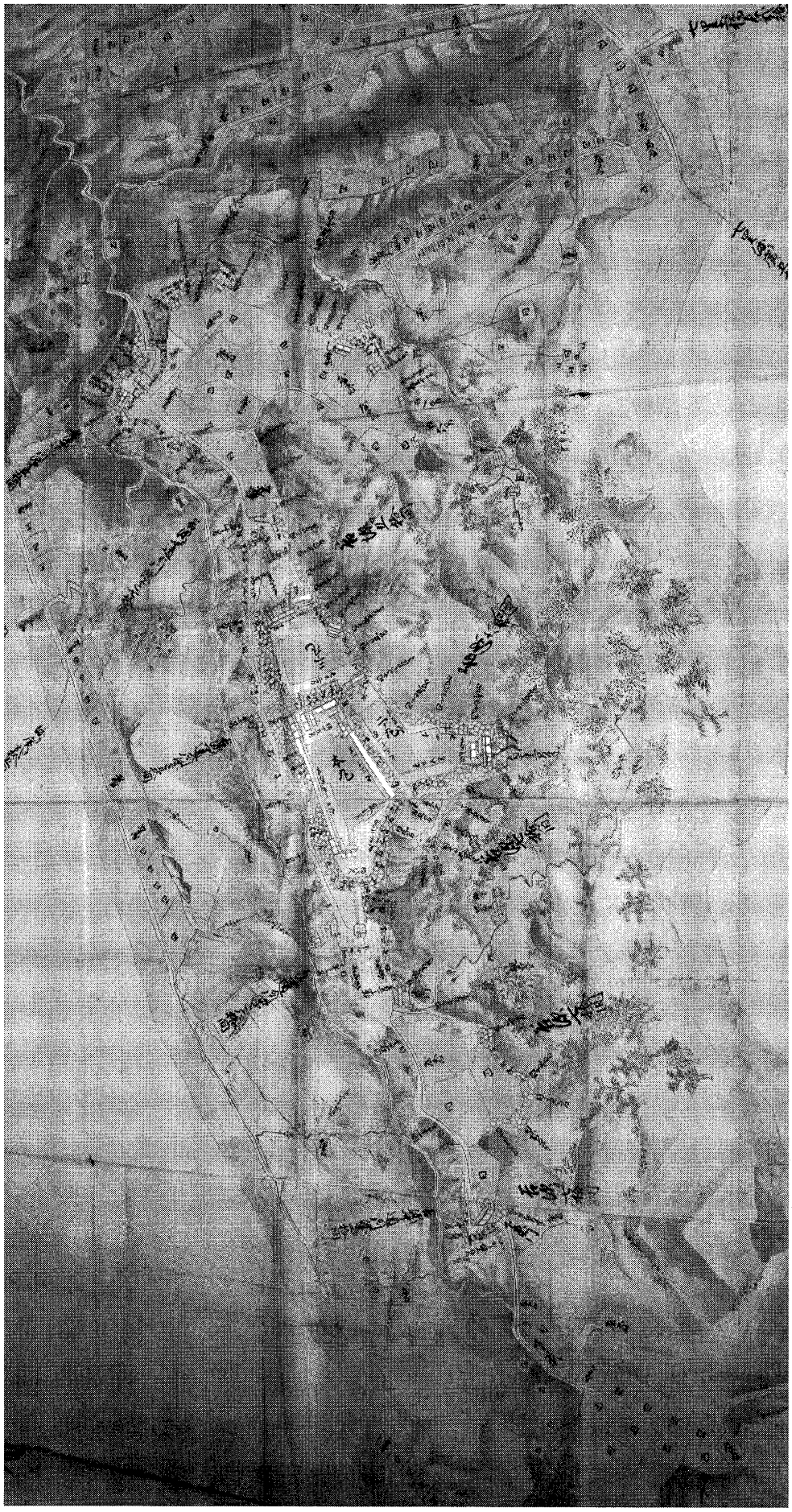

図3　《城中より各屋敷への道筋》（部分）　竹田市立図書館蔵

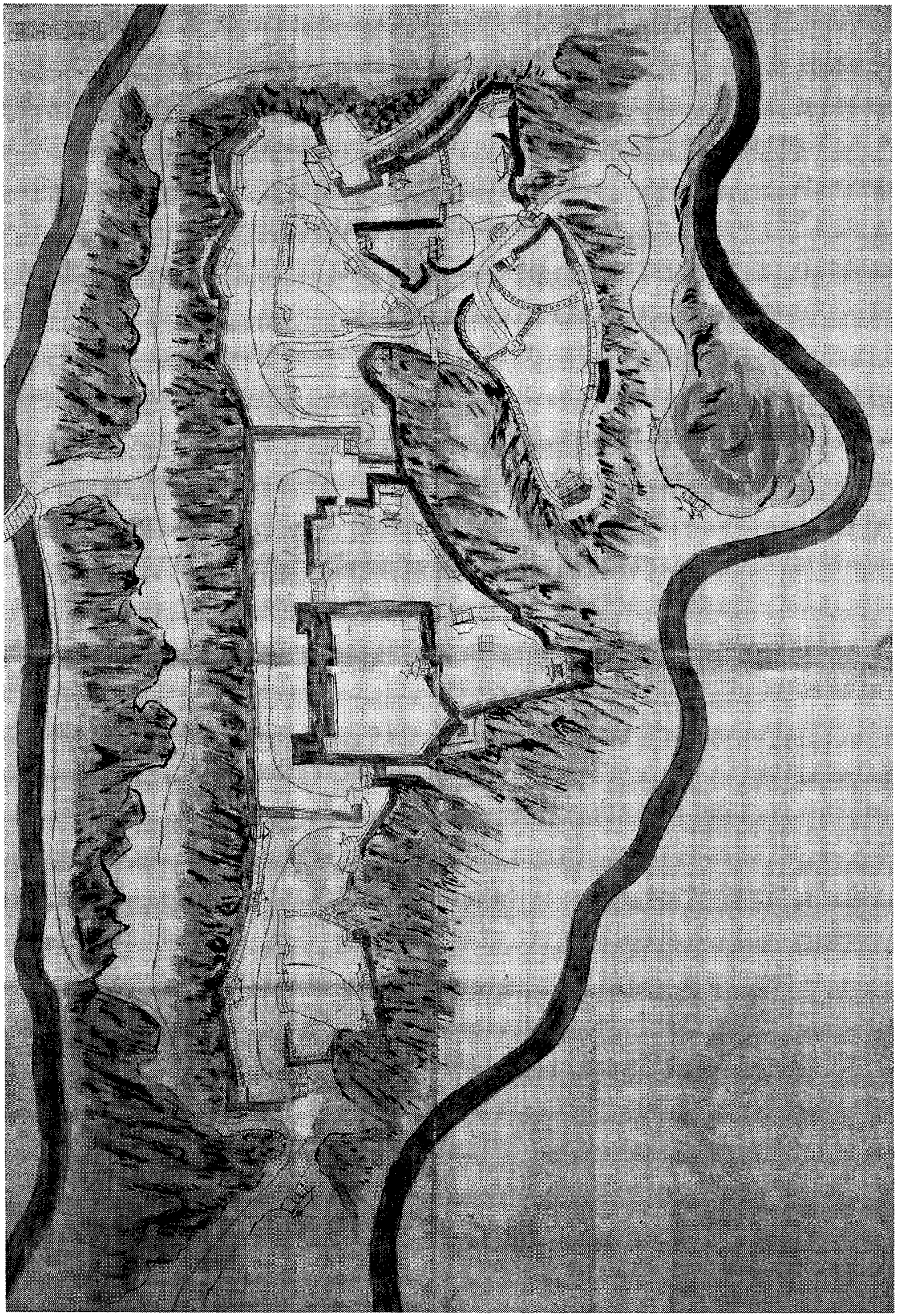

図４《豊後国南郡岡城之図》
［日本古城絵図］西海道之部341、国立国会図書館蔵

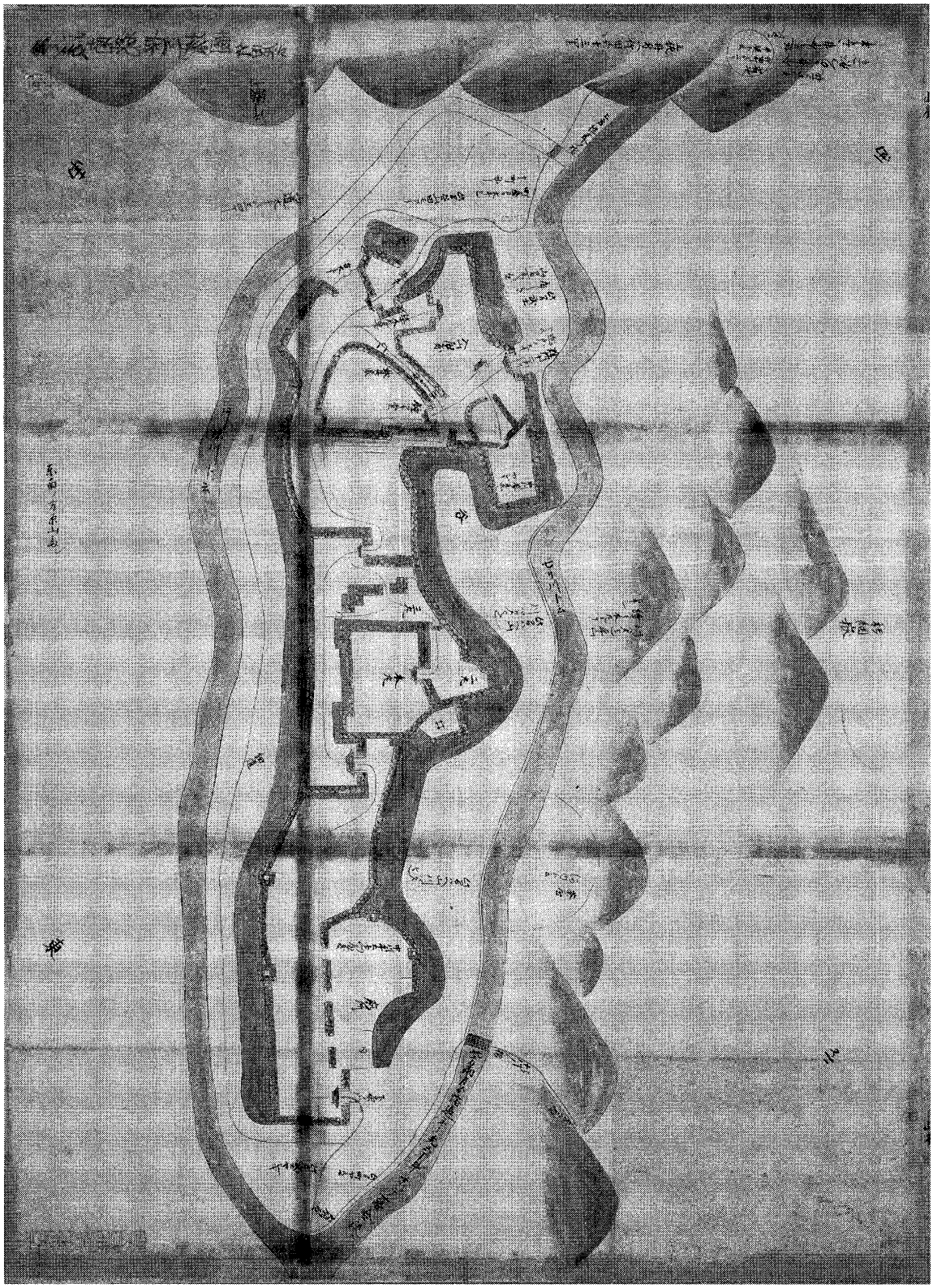

図5 《豊後国岡城図》
［日本古城絵図］西海道之部342、国立国会図書館蔵

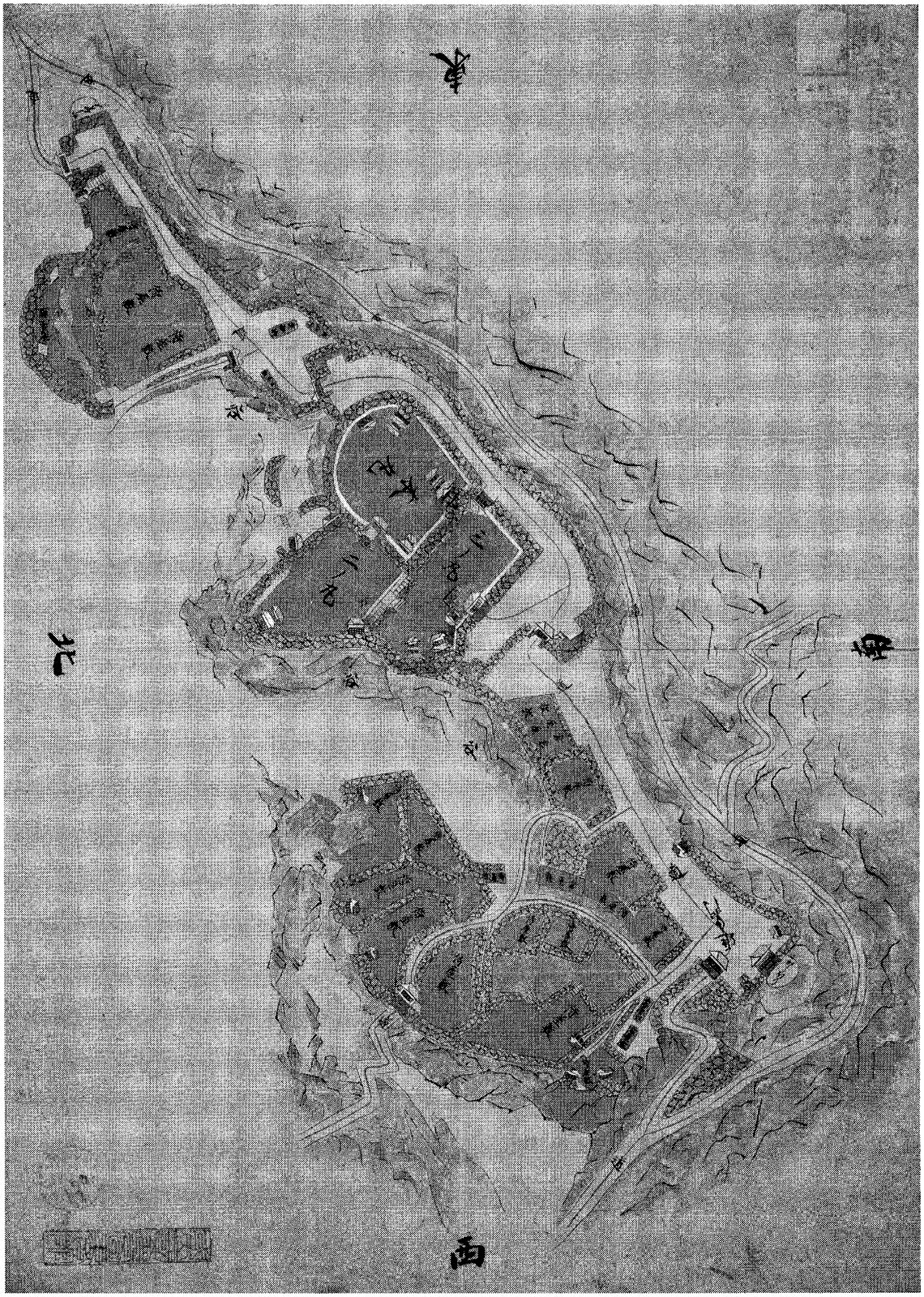

図6 《豊後国岡城之図》
［日本古城絵図］西海道之部343、国立国会図書館蔵

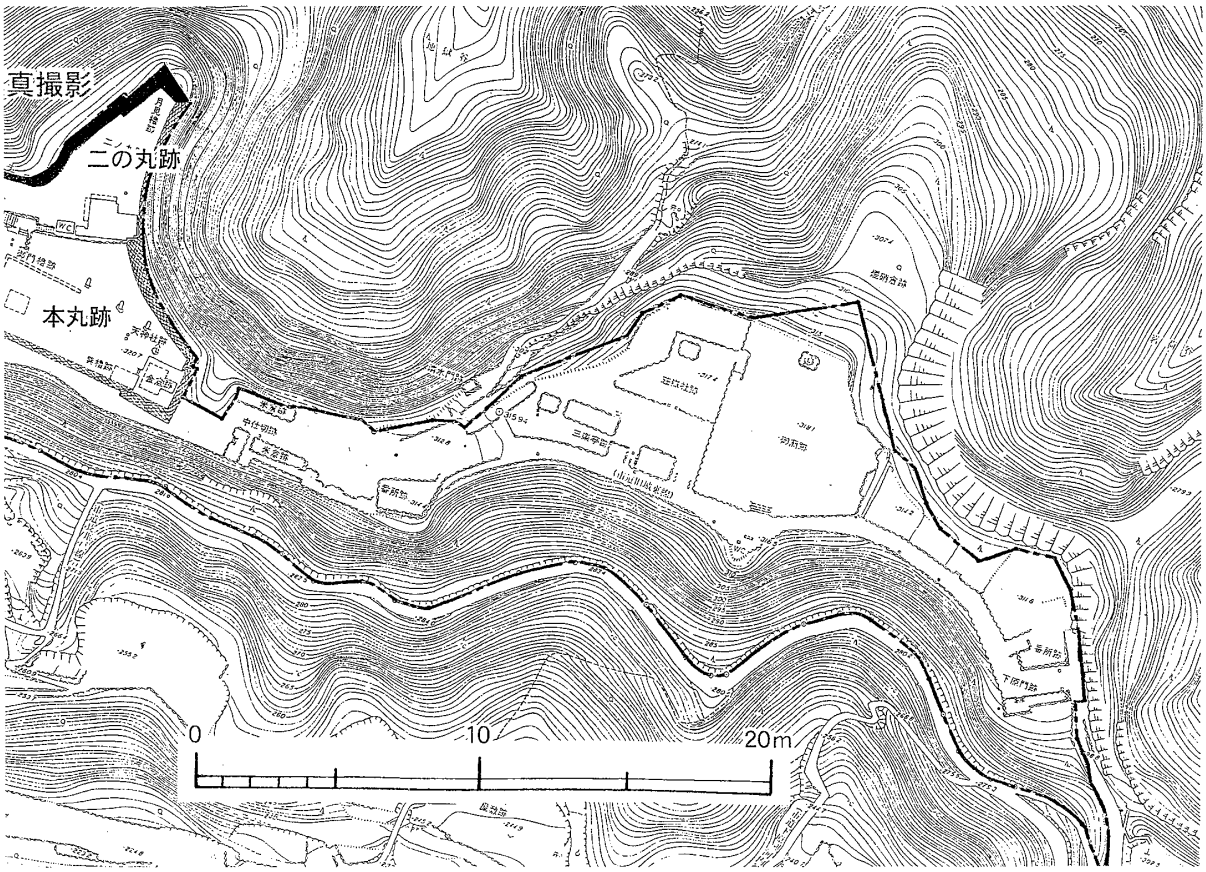

図7-1　豊後岡城図〈東ノ郭〉部分
『平成13・14年度史跡岡城跡保存修理事業（災害復旧）報告書』所収第2図（部分）より

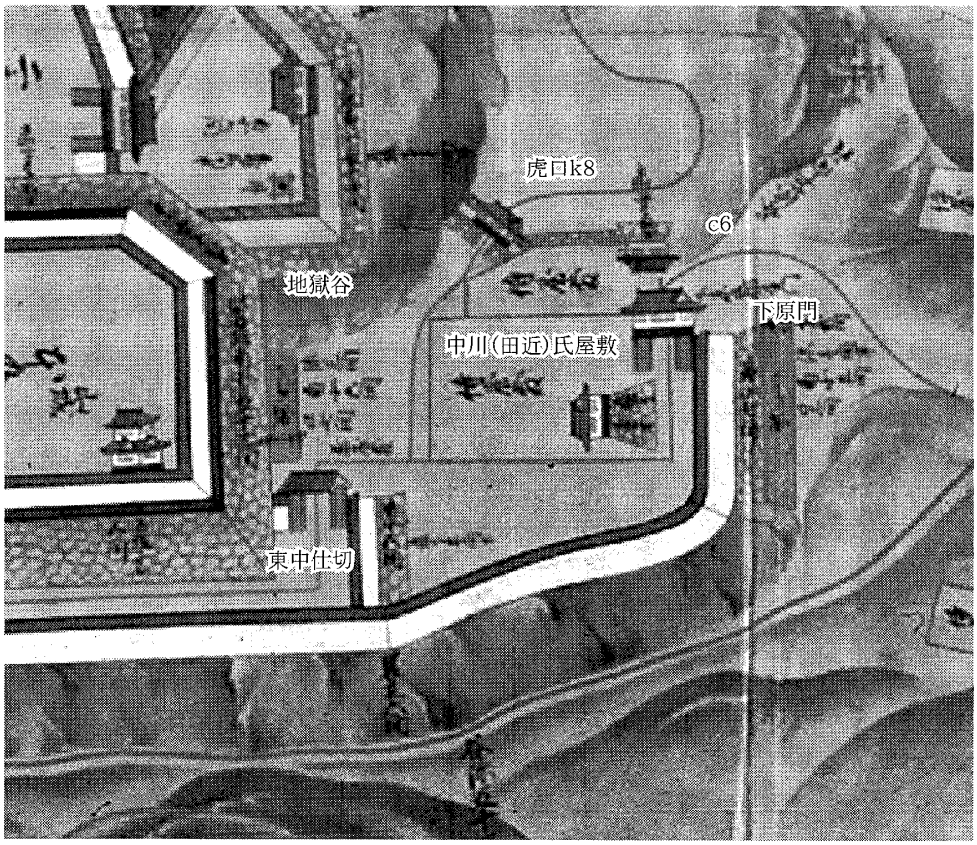

図8　豊後直入郡岡城絵図〈東ノ郭〉部分
《豊後直入郡岡城絵図》　国立公文書館蔵に加筆

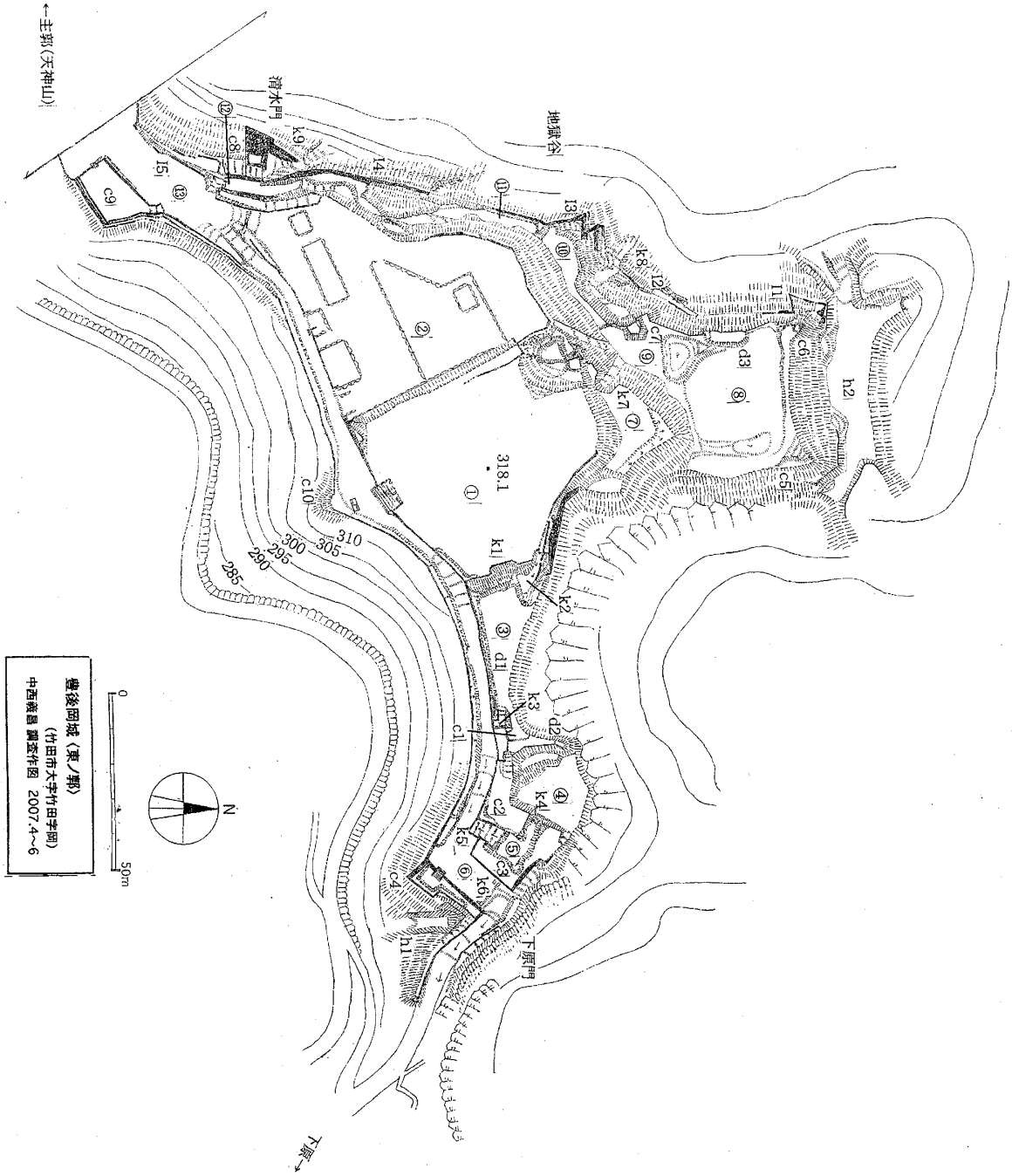

図7-2　豊後岡城〈東ノ郭〉縄張り図　中西義昌　調査作図

写真１　東ノ郭西側斜面石垣（規格化されたタイプ）

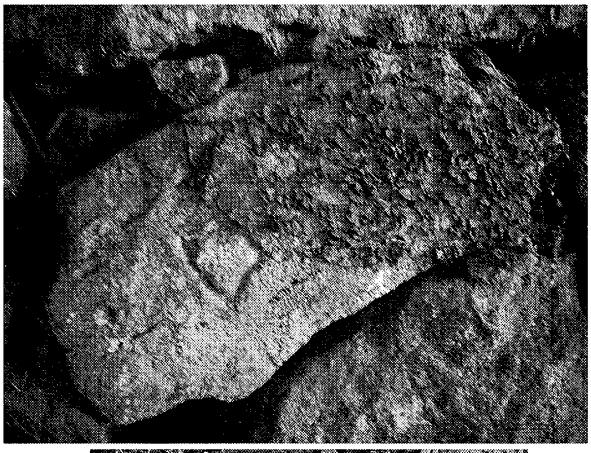

写真２　東ノ郭西側斜面石垣（古式なタイプ）

図9　豊後岡城図（主郭（天神山）・西御郭）部分
『平成13・14年度史跡岡城跡保存修理事業（災害復旧）報告書』所収第2図（部分）に加筆

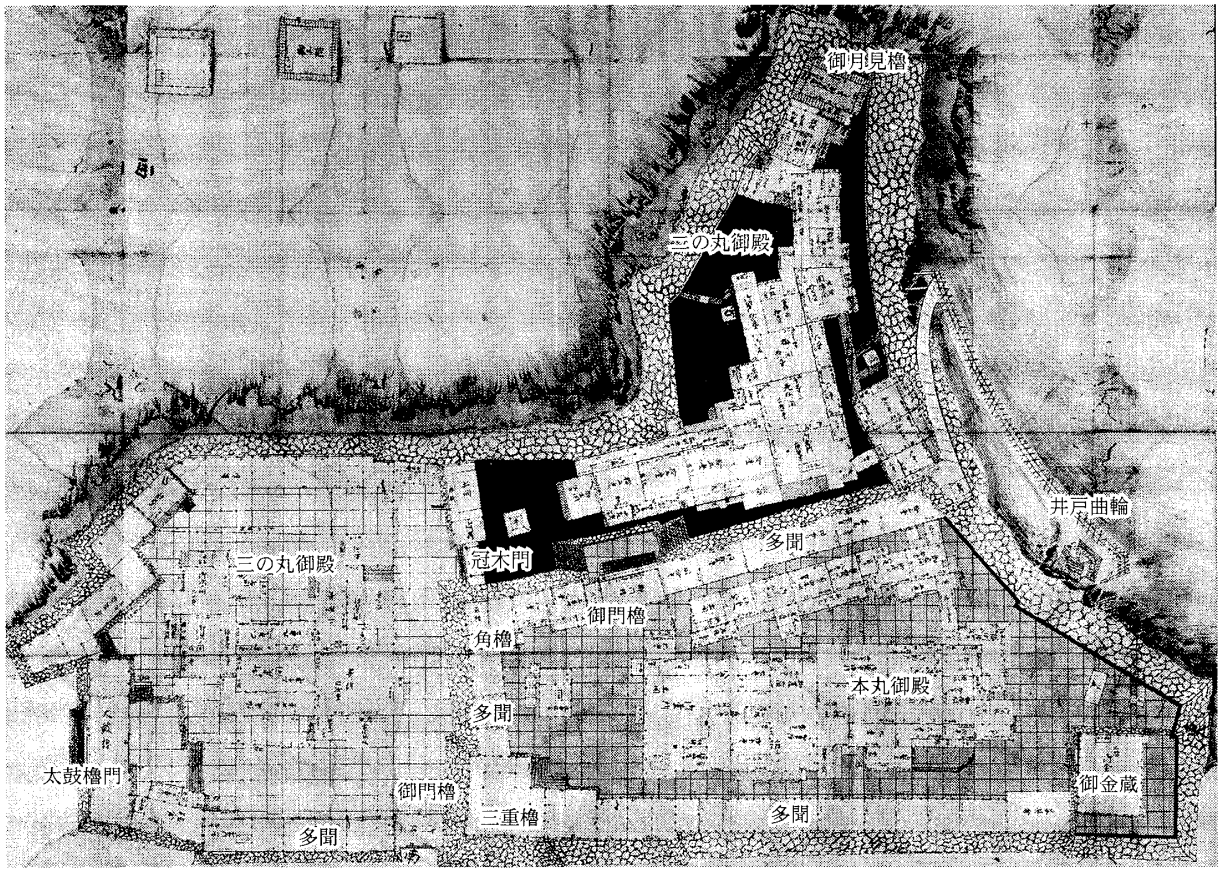

図10　豊後岡城本丸・二の丸・三の丸
《岡城本丸平面図》竹田市立図書館蔵　に加筆

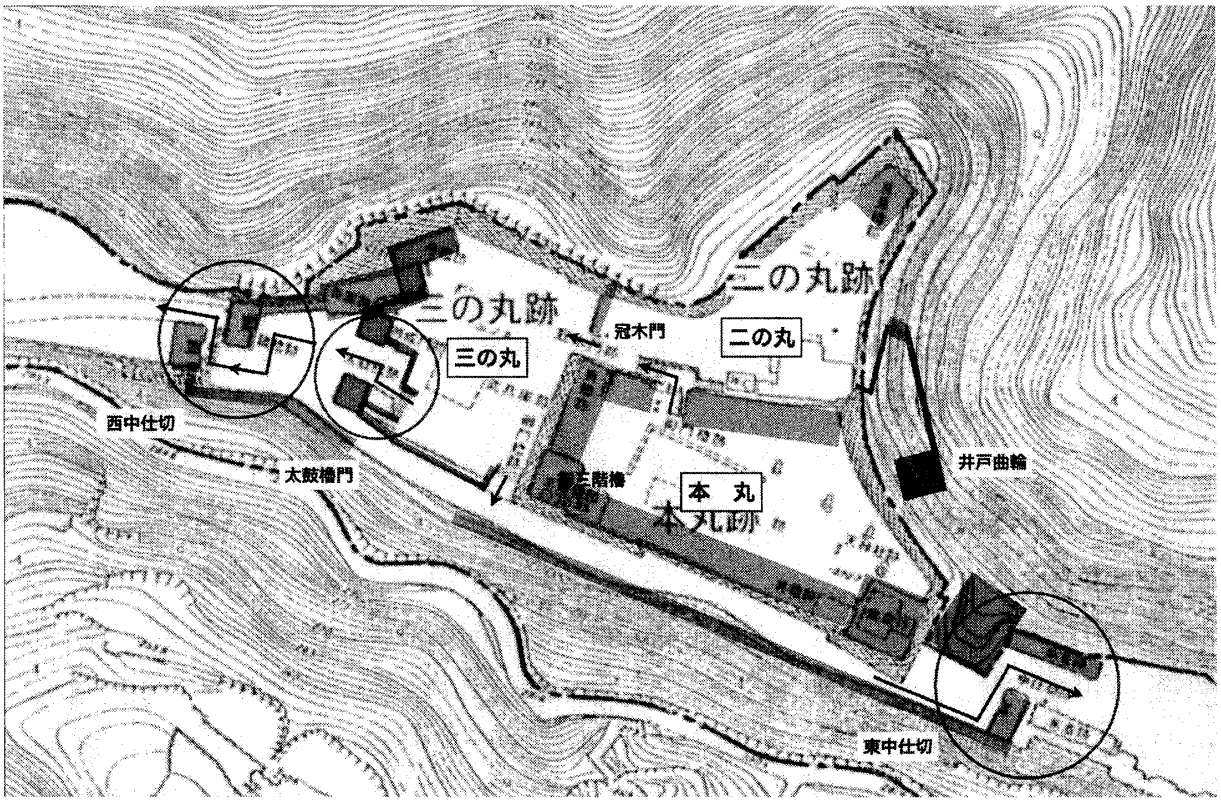

図11　豊後岡城主郭（天神山）の縄張りと虎口プラン